

Title	オーラルヒストリーをめぐる問題についての雑感： 4人の専門家による報告を聴いて
Sub Title	
Author	荒井, 芳廣(Arai, Yoshihiro)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2010
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.15 (2010. 7) ,p.53- 60
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集1: 地域研究とオーラルヒストリー
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20100700-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーラル・ヒストリーをめぐる問題についての雑感

4人の専門家による報告を聴いて

荒井 芳廣

はじめに

オーラル・ヒストリーの4人の専門家による報告を聴いて、この方法が提示する議論の広がり的重要性を再認識させられた。この方法が提示する様々な問題を整理する仕事は重要な仕事であるが、報告者の問題提起のすべてをこの場で論じきることはとても無理であり、筆者の手に余る課題であるので、ここでは報告を聞きながら筆者の頭に浮かんだ雑感を書き連ねることを、特に報告者の方々に許していただきたい。報告を聴いてからかなり時間が経っているので、自分の中になぜこのような雑感が生まれてきたかについて考えてみる時間があったので、はじめにそのことについて述べたい。

オーラル・ヒストリーの重要性について多少興味をもって考えるようになったのは、オーラル・ヒストリーではなくライフ・ヒストリーについて論文を書いたことがきっかけであった。一つは「研究ノート：非典型的デュルケミアン、R・バステードの軌跡——宗教社会学から社会精神分析へ——」、『人間関係学研究』（大妻女子大学人間関係学部紀要）3、pp.253-263）、もう一つは「ピシギーニャと呼ばれた男——二十世紀初頭のリオ・デ・ジャネイロで黒人大衆音楽家であることに抗して」（未刊）である。

前者はラテンアメリカにおける社会科学の歴史についての考察の一環として、フランスにおけるブラジル黒人の文化および宗教の研究とブラジル特にサンパウロ大学の社会学研究において大きな影響を与えたロジェ・バステードのライフ・ヒストリーを追ってみた論文である。その結果、フランスの社会科学においてはデュルケミアンというという規範的なライフコースがあり、その基本はノルマリアン（高等師範学校出身）で最終的にはパリ・ソルボンヌ大学およびコレージュ・ド・フランスの教授になり、フランスの学会で指導的地位を占める、という流れである。ライフ・ヒストリーにおいてサンパウロ大学で教鞭をとったという一要素を共有しながらも、ノルマリアンでないということで、同じ民族学者のレヴィ＝ストロース、社会学者ではないのでデュルケミアンではないが、歴史学のブローデル、地理学のモンベイクらとは異なるライフコースを辿らざるをえなかった。最終的にはロジェ・バステードもパリ・ソルボンヌ大学およびコレージュ・ド・フランスの教授を務めたが、似ているだけに対比も大きい。M・モースの弟子であるが、スイス生まれで高等師範学校と同様のグランゼコールであるフランス国立古文書学校（École nationale des chartes）に学んだA・メトローについても同じことが

言える。

しかしこの論文ではロジェ・バステードが、非典型的デュルケミアンであることによってライフ・ヒストリーにおいてどのような戦いをしたのか具体的には明らかにすることはできなかったが、その後、学者としての自分のアイデンティティをめぐる日々の戦いは、往復書簡(P・ヴェルジェとバステードの間の往復書簡)や日記(A・メトロの日記)のを読み、研究者としてのアイデンティティを模索して苦闘する姿を知ることができる。

「ライフ・ヒストリーにおける非典型性」について強く意識するようになったのは、ある研究会で「ピシンギーニャと呼ばれた男——20世紀初頭のリオ・デ・ジャネイロで黒人大衆音楽家であることに抗して」という報告をしたときである。この研究会での課題は、環大西洋地域(アフリカ、南北アメリカおよびカリブ海地域)のアフリカ系の人々の個体がいかに形成されるか、有名無名にかかわらず、時代、地域、および準拠集団とのかかわりを強調することによって、特別な存在ではなく同時代人や同じ準拠集団に属する人々に共通する部分を描きながら、最終的になぜそうした固有名詞をもつ存在になりえたのかをも明らかにすることであると解釈して、ブラジルポピュラー音楽の父ともいわれる存在であるピシンギーニャという黒人音楽家のライフ・ヒストリーを選んだのである。奴隷制廃止後も社会的に抑圧された存在であった新大陸の黒人(Afro-Americans)の歴史研究において、「オーラル・ヒストリー」は重要な資料、あるいは資料の収集方法である。この分野では元奴隷のライフ・ヒストリー、逃亡奴隷社会の研究に不可欠な逃亡奴隷(Maroon)への聞き書き、大土地所有制下での小作農民のライフ・ヒストリーなど優れた成果が残されている。しかし報告のテーマについて迷った結果、すでに故人であるピシンギーニャというすでに何冊かの伝記をもつ音楽家のライフ・ヒストリーについて報告することにした。この20世紀初頭に活躍したリオ・デ・ジャネイロの黒人音楽家のライフ・ヒストリーを論ずることによって、この時期のブラジル社会における黒人の位置、ステレオタイプとして形成された黒人大衆音楽家のライフスタイルとライフ・ヒストリー、その形成を促進した文化イデオログ、それらと戦った一人の音楽家の姿が浮かび上がってくると予測されたからである。ピシンギーニャは正式な音楽教育は受けなかったが、家庭、特に父親の友人関係などから、単に演奏や作曲の能力だけでなく、記譜や編曲の能力も身につけており、同時代の、そして同僚の音楽家たちとは一線を画す志向の持ち主だった。この同時代黒人音楽とある意味では微妙な「差異」を、それを打ち消そうとする種々の力に抵抗して、静かなる戦いを一生涯にわたって続けたのではないかというのが、報告の主旨であった。彼の伝記にはそうしたピシンギーニャの姿勢に与する部分とそうでない部分もあるが、ライフ・ヒストリーには伝記のほか、小説、百科事典的記述、音楽史、建築史などの資料がかかわってくるが、ステレオタイプ化されたライフコースの押しつけに対する抵抗する彼自身の姿を伝えるのが、「映像と音の博物館」(Museo da Imagem e do Son)によって録音され収蔵されている音楽家自身への聞き書き資料だった。

以上が4人のご報告を聴いた時点でのオーラル・ヒストリーにいただいていた構えのようなも

のであったので、その時にも正直に言って報告の内容を十分に理解できなかった。この稿を書くに際して報告者の書かれた他の文章、引用されている著作のいくつかを読んで理解を深めようとしたが、はじめにいただいていた構えから抜け出すことができなかったが、学ばせていただいたことも多かった。それらをすべて整理して書くことが悔やまれるが、そういう状態を正直に示すことが今の自分の役割と覚悟してコメントをさせていただく。

さて、手法としてオーラル・ヒストリーを用いることの目的は単一ではない。それはこの手法が異なる学問分野がその方法論的状况に応じて要請される課題にその都度応える形で、この手法の方法論的重要性が評価されてきたことに起因する。従ってオーラル・ヒストリーの効用は多元的であり、それらのあいだに完全なる一貫性があるかどうかは少なくとも議論の課題として残されているのではないか。たとえば文化人類学では文字をもたない集団を研究対象としてきたため、データとしては物質文化の分析、調査者による観察記録、そして情報提供者からの聞き書きと口頭伝承が主なるものであった。彼らの歴史を研究するには文字をもつ社会の歴史研究において主要な資料である文字資料が不在であるからである。「無文字社会における歴史」の再構成において口頭資料の重要性が注目されるようになったのである。その結果、歴史的記憶の存在形態として（口頭による）「語り」と「語り手」の存在が注目されるようになったのである。無文字社会では、オーラル・ヒストリーと神話や伝説などの口承芸能とが、パフォーマンスの上で連続している（アフリカの部族社会における「グリオ」のように）。従って小林多寿子さんが論じているジェネラティヴィティ、すなわち「語り手→聞き手／語り手→聞き手」の連鎖は自明のことであり、むしろその連鎖のなかで生ずる変形とその意味が問題とされることが多かった。

これに対し民俗学における「聞き書き」の重要性は、「忘れられた日本人」という表現が示すように、書かれた資料とオーラル・ヒストリーが並存する社会において従来の歴史学が資料として依拠してきた文字資料に記録される人間、あるいは文字資料を残すことのできる人間とは異なる、人間の「語り」に耳を傾けることの重要性が強調された。さらに植民地状況の中で、支配的言説による被支配的言説の抑圧に対する告発あるいは権利回復の運動のなかから敗者、被征服者の言説の復権として「オーラル・ヒストリー」の重要性が主張された。

最初の報告者、小林多寿子さんの報告（「オーラル・ヒストリーと地域における個人の＜歴史化＞」）は、「ジェネラティヴィティ」（世代継承性）という概念でくられるオーラル・ヒストリーにおける語りの継承のプロセス、再話の場としてのイベント、こうしたプロセスを通じて進行する個人の＜歴史化＞を、事例を挙げて説明している。

小林多寿子さんの報告で私自身、印象に残り示唆を得たのは、（1）出来事の細部へのこだわりと（2）アーカイブおよび提示の方法へのこだわり、（3）歴史認識における物質的かつ象徴的な空間としての記憶の場所の重要性である。

細部へのこだわりは、体験伝達の不可能性の極にまで進めようとしている。体験の本質は、体験した個人のみが認知しうる感性的特性（音、におい、触感など）にあり、これは他者には

伝えることができないものである。だとすればそもそも「聞き書き」という方法は不可能である。しかし、オーラル・ヒストリーの可能性を信ずる研究者は、そうしたギリギリの局面で、感性に訴える「もの」の喚起力を信ずることによって、他者の体験の細部を再現し、多くの人々に伝える仲介役を務めるという自己の役割を主張する。身近なものの中に細部の記憶の導きによって壮大な物語を再現するブルーストの企てに似ている。

記憶と保存というテーマに関する一つの感銘を受けたエピソードがあった。実家の保存公開を望む多くの声に対して、保存を望まないことを表明したある高名な人物の決断である。この出来事の真相や真実を知らないのでこの問題に対する是非の判断ができないし、その人物に対し特に思い入れがあるわけではないが、一つのたとえ話として共感できる話であると思ったのである。すなわち自分が生まれ育った家に対しては、その細部に至るまで愛着があり、それらが喚起する記憶の中の出来事や人々は、それらを共有するごくわずかな人間を除いては感ずることができないものである。自分を含めたそれらについての記憶を共有する人間とともに消失してしまったとしても、不特定多数の人間によって汚され異なったイメージや評価にさらされることには耐えられない。むしろ消失することによってしか記憶が守られないのではないか。という考え方のたとえ話としてである。

オーラル・ヒストリーの再現の場については、JICA 海外移住資料館の AV 展示、ひめゆり平和祈念館証言ビデオやボランティア・ガイドなどわずかな体験しかないが、再現の場としては優れた方法だという印象をもった。ただなぜそれらの音声資料だけが選択されたかという疑問（それはなぜそれらの音声資料だけが採集されたかということにも通じるが）、再現の場とそれらの資料の保存・検索の場とは別の方がよいのではないかと単純に思った。オーラル資料も資料である限り、資料批判の対象であるべきであるし、すでに多くの方々で議論されているように図書館と同じような組織的な収集・保存・検索が必要であると思う。しかしその作業と、ミニドカ・ピルグリメージおよびレユニオンのようなイベントあるいは運動は区別されるべきであると思う。民俗学や民族学においても再話は「間テクスト性」や「変形」としてそれ自体が考察の構造分析や歴史学的考察の対象である。

2 番目の報告者、倉沢愛子さんの報告（「文献とオーラルの効果的併用の一例 ―日本軍政期のジャワにおける行政官大量罷免事件の真相をめぐって」）は、歴史学における書かれた資料の欠如を補完するための「オーラル・ヒストリー」の使用についての議論である。この議論は報告者自身の長年にわたる歴史学研究において、かなりの時間を費やした「オーラル・ヒストリー」の調査がどのような意義をもつものであったかを明らかにしている。まず文献資料の詳細な吟味があり、その作業の中で文献資料だけではその意味を解釈できない事実を示すデータが抽出される。次にこのデータをもつ意味を明らかにするために聞き取り調査が行われる。この調査で集められた「オーラル」資料によって、意味が明らかでなかった文献資料の検討では明らかにならなかったデータを解釈し、またこの解釈を補強する文献資料を検討するなど文献研究のプロセスに戻る。オーラル資料にも厳密なテクストクリティックの必要なことを再認識

させられた。

文献資料にはその言説を残すことがなかった人々の言説を、調査者の働きかけによって顕在化すること。その言説がなぜ書かれた資料として残されなかったということの理由は、いくつかあるが、文字がない、文字が書けない、文章を書き遺す習慣がない、時代状況。社会的状況が文字的、口頭的にかかわらず言説の表明を抑圧していることが考えられるが、清水透さんの報告（「＜経験＞と他者理解 ―メキシコ・チアパスにおける聞き取り調査を踏まえて」）は、征服、植民の歴史のなかで語ることを抑圧されてきたラテンアメリカの村落での長期間にわたる聞き取り調査に裏付けられた考察である。清水透さんは、オーラル・ヒストリーという方法で地域像を構築する場合、聞き手と語り手の関係において聞き手の側の価値観で地域を構築するのではなく、聞き取りの対象から学び我々の価値観を豊かにするために構築すると述べている。それは、かつては聞かれる一方であった人々は、聞かれるということを通じて自ら主体的に語り始めることを意味し、最終的には聞き手である研究者・調査者の存在も不要となるということ意味するのではないか。調査者の役割はかつての年代記作者のように描く対象と読者にあいだに立つ媒介者にすぎず、真の意味での語り手は聞き書きの対象にあり、彼らが語り始めた時点で聞き手の役割は終えるのである。私は清水さんの数々の業績のなかの聞き書きによる先住民のライフ・ヒストリーあるいはその翻訳などは、そのような読み方をしてきた。それと同時に聞き手は、自らの価値観の相対性を発見し、専門領域である地域（清水氏の場合、ラテンアメリカ）枠を超えた現象へと関心の方向を向け、新たな語り手との協同あるいは共闘の可能性を開いてくれる存在となる。それは研究者にとってある一つの思想的立場を確信的に選ぶということの意味している。それは倉沢さんの場合も同様で思われ、オーラル・ヒストリーという方法に必然的に伴う責任である。

生きている人間のライフ・ヒストリーの聞き取りを継続的に行っている清水さんの調査の場合、同じ人間が異なる時点で異なるストーリーを語る可能性、自分のライフコースの捉え方を変える可能性がある。ラテンアメリカ史研究におけるオーラル・ヒストリーの成果の一つである『敗者の想像カーインディオのみた新世界征服』（*Vision des Vaincus*. 1971、岩波書店 1984年）の著者ナタン・ワシュテルは『神々と吸血鬼』（*Dieux et vampires. Retour à Chipaya*, 1992、岩波書店 1997年）で、かつて調査をした村落を再訪し、その時に出会った人々に起きた変容を描いているが、清水さんの調査ではどのような変容がみられるのかについてもっと詳しく聞きたかった。というのもオーラル・ヒストリー研究において、ストーリーの変容がどのようにして起き、どのような意味をもつかを明らかにすることは、重要な理論的課題だと思われるからである。

最後の柳田利夫さんの報告（「移動とアイデンティティ生成 ―日系二世の生活と地域」）は、私もそのほん一部に加わったことのあるペルー日系人調査に基づく報告である。この議論の中心は、提示スライドにある「移動とアイデンティティ形成、（1）「近代」における人の移動 → 「二つの地域」とアイデンティティ生成、（2）移住者の抱える問題、出自社会・ホスト社

会の抱える問題→「近代」が生成し続けるコンフリクト」、とりわけ前者の問題であると思われる。というのはオーラル・ヒストリーと深く関わるは前者の問題だからである。通常ならば日系移民のライフ・ヒストリーの聞き書きというところを、「移民」ではなく「移動」という言葉を使っているところが注目される。移民とは民の移動であり、それは政治的社会的問題であるが、個人の問題として考えた時、それはまさに二つの地域のあいだの移動であり、そのライフ・ヒストリーは、移動したことによって、そのライフコースのパラメーターの変更を余儀なくされた人間の判断の連続の軌跡である。この状況では、出自社会の規範もホスト社会の規範も、行動のための一つの選択肢にすぎない(柳田さんのペルー調査に参加させていただいたときに、私が沖縄移民の宗教生活、特にトートメー(位牌)の継承に注目したのは、この問題に対する態度の選択が、沖縄移民のライフコースに影響を与えると考えたからであった。というのは沖縄移民が長男であった場合、沖縄社会の規範に従った場合、帰国しなければならず、実際に帰国した人もいた一方で、同じ状況にありながら、そのままペルーに留まった人もおり、その場合、その個人がどのような解決方法を見出してライフコースの変容を実践したかに興味があったからである。

個人にとっての「移動」のもつ意味について、ペルー移民の場合にそれ以上の事例を知らないで、自分自身のフィールドの例をもって代えることを許していただきたい。1964年にハイチからフランスを経てカナダに亡命し、モントリオール大学で教鞭をとると同時に作家活動を行ったハイチ移民作家であるエミール・オリヴィエ(1940-2008)の事例である。かれは、クレオール作家として注目され来日して講演活動も行っているが、教育社会学を専門とするだけあってその創作、主題の選択や物語の展開に、直接的あるいは図式的にはないが社会学的な認識がベースにしている作品が多い。とりわけ小説『航海記』(*Passages*, 1991)とエッセイ『位置測定』(*Repérages*, 2001)は、国を出て暮らすハイチ人(自分自身)について示唆に富んだ考察を提供してくれる。

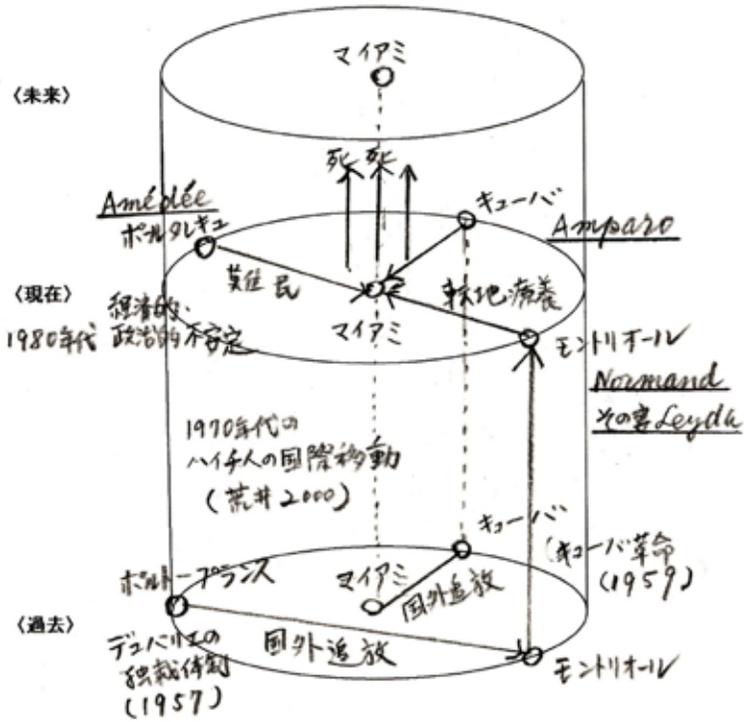
エミール・オリヴィエが終の棲家として選んだモントリオールは、ハイチ移民にとって、移民の最終目的地であると同時に北米、特に合衆国東海岸の諸都市、ニューヨークやボストンへの移民の中継地の1つと考えられていた。中継地として選ばれる条件には、地理的的近接性と言語=文化的近接性などが挙げられるが、カナダのフランス語圏であるケベック州の中心地であるモントリオールは、上記の合衆国諸都市に比して地理的に遠いにもかかわらず、中継地であったのは、言語=文化的な近接性に因っていた。ハイチ→モントリオール→合衆国東海岸諸都市というルートである。しかし同様の条件をもち、かつ地理的な近接性を有する移民先(マルチニック、グアドループ、仏領ギアナ)と比較すれば、モントリオールは、距離が遠さとその都市的環境から、移民者の職業や階層に違いがあった。就労の機会も多く、フランス語に習熟したエリート層にとっては、移住の最終目的地となった。都市的環境をもちながら、移民の波の初期においては、中継地であると同時に最終目的地あるという二面性をもっていたのがマイアミであった。しかしマイアミは、1957年のキューバ革命以来、キューバ人をはじめとした中

南米のスペイン語圏あるいはブラジルからの移住者によって移民共同体として大きな変容を遂げることとなる。マイアミの移民共同体の事例は、「各移民共同体は、人種、宗教、言語などの違いによって社会の階層構造のどこかに位置づけられ、この階層の階梯を上昇しようすれば、自分の共同体の外にある主流の価値体系を採用し身につけなければならない」というシカゴ学派による移民共同体に関する都市社会学命題に対する反証例であるとする仮説を生み出している（cf. Portes, A. & Stepick, A. 1997）。マイアミでは特定の社会集団が主導権を握るのではなく、複数の社会＝文化システムが併存しているという視点である。近年、合衆国のハイチ移民には、合衆国各地からマイアミに再移住する動向が見られるという。

エミール・オリヴィエの『位置測定』（2001年）という130ページに及ぶエッセイは、「国外追放が自分の人生のパラメーターを大きく変えざるを得なかった」亡命作家としてのアイデンティティを、ギリシャ哲学者から現代哲学者、現代作家まで広汎に引用しながら考察した「亡命者についての存在論的考察」である。『航海記』（1991年）において、オリヴィエは、自身をモデルにしたと思われるハイチ→カナダ→マイアミと移動する登場人物（ノルマン）とハイチ北部の小さな村からボートに乗ってマイアミに流れ着いた経済難民たちのリーダー、アメデー（彼は1970年代から現在まで続くハイチ人の集団的移動体験の象徴である）とハイチ移民2世で、ヨーロッパ、アメリカ、キューバを移動し、コスモポリタンの性格をもつアンパーロを、マイアミという「移民が主役の都市」で出会わせている。オリヴィエはこの3人のどの人物の体験を特権化せず、彼らの過去、現在、未来（終末）の軌跡を淡々と描き、ハイチ人の移動体験の多元性を明らかにしている（図を参照）。私はこのオリヴィエによるハイチ人の移動の多元性の物語は、ボートピープルについてのみ語られることの多いハイチ移民のイメージに対する抗議として解釈したい。

終わりに

以上が、4人の専門家の報告を聴きながら、自分のライフ・ヒストリーを他者から押しつけられることに抵抗した一人の音楽家の人生についてのこだわりをもった人間の頭に浮かんだ雑感である。その他にも報告者が挙げられていたオーラル・ヒストリーについての文献を読ませていただき、数々の洞察に触れさせていただいた（例えば、阪神大震災に関して「記憶」の多様性（差異）が失われ、あるひとつの像（イメージ）へと集約されてしまう」ことへの大門正克氏の危惧）。それらを列挙する方が本当は有益だったかもしれない。



(あらい よしひろ 大妻女子大学人間関係学部)